

飼っていたインコの病気にかかって発熱（オウム病）

インコが死んだあと、飼い主が高熱を出して重い肺炎をおこした事例がありました。

オウム病の病原体は、オウム病クラミジアです。もともとトリからトリに感染します。ヒトも汚染されたトリの羽毛やまき散らされた排泄物などを吸い込んで感染します。主として、オウム、インコですが、その他のトリも感染し、感染したトリが病気になったり、体調を崩した際には、特に大量に排菌することが知られています。

ペットも定期健診で病気の早期発見を

動物由来感染症に感染しても動物は軽い症状で終わったり、無症状なことがあるため、知らないうちに飼い主が感染してしまう場合があります。

ペットに定期健診を受けさせるなど、日常の健康管理に注意し、病気を早めに見つけましょう。

—日常生活で注意すること—

一般的な衛生対策を守れば、ほとんどの病気は予防できるので、日常生活では次のことに注意しましょう。

・動物にさわったら必ず手を洗いましょう。

動物の唾液や粘液にふれたり、傷口などにさわってしまうこともあるので、動物に触ったら必ず手を洗いましょう。

・過剰なふれあいは控えましょう。

口移しでエサを与えたり、スプーンや箸の共有はやめましょう。動物を布団に入れて寝ることも、濃厚に接触することになるので要注意です。

・動物の身の回りは清潔にしましょう。

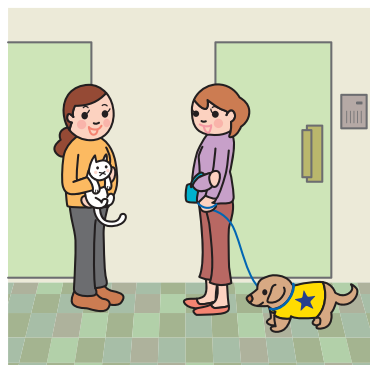
小屋や鳥かごなどは、よく掃除をして清潔を保ちましょう。タオルや敷物、水槽などは細菌が繁殖しやすいのでこまめな洗浄が必要です。

・糞尿は速やかに処理しましょう。

糞が乾燥すると空気中に漂い、吸い込みやすくなります。糞尿に直接ふれたり吸い込んだりしないよう気をつけ、早く処理しましょう。

・室内で鳥を飼育するときは換気を心がけましょう。

羽毛や乾燥した排泄物、塵埃などが室内に充満しやすくなります。室内の清掃のほか、定期的に換気に努めましょう。

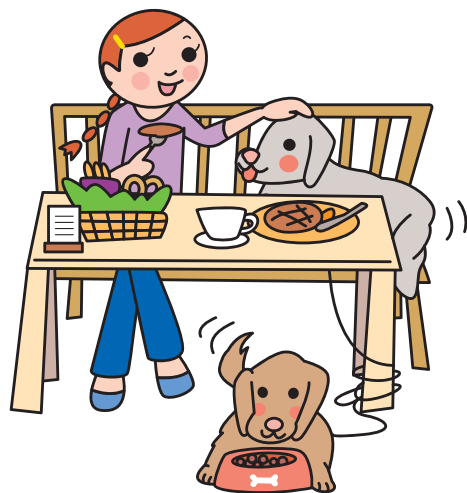


動物由来感染症

動物から感染する病気(動物由来感染症)があります。 正しい知識を身につけて動物と接しましょう。

本県では、平成20年度に財団法人地方自治研究機構との共同研究事業として「愛玩動物の飼養のあり方に関する調査研究」を実施したところ、県内の犬の飼養頭数は約45万頭で、うち5万頭が集合住宅で飼養されており、ねこの飼養頭数は約47万頭で、うち9万頭が集合住宅で飼養されていると推計されました。

このように、動物を家族の一員として屋内で飼うケースが増加しています。屋内飼育には、交通事故、感染症、迷子、望まない繁殖等を防止することができるという動物愛護管理上のメリットがありますが、動物由来感染症の予防という観点からは、動物との節度ある接し方が重要となります。



体に不調を感じたら、早めに受診を

動物由来感染症に感染しても、参考例のように風邪やインフルエンザ、ありふれた皮膚病などに似た症状がでる場合が多く、病気の発見が遅れがちです。

医療機関を受診する際は、ペットの飼育状態や動物との接触状況についても医師に話しましょう。

—参考例—

ペットの口の中に普通にいる菌で飼い主が病気に(パストレラ症)

犬やねこに咬まれたり、引っ搔かれたりした場合に、パストレラと呼ばれる細菌がヒトに感染することがあります。

通常は、咬まれたりした場所が赤く腫れたりするのみで一般的には軽症ですが、傷が深かった場合は骨髄炎になったり、まれには発症したあと風邪のような症状を起こすことがあります。普通予後は良好です。

ネコを飼ったらインフルエンザ様の病気に(Q熱)

ネコを飼い始めたところ、微熱や倦怠感が続いたため、受診し、Q熱と判明しました。併せて家族やネコも検査したところ、抗体陽性であることがわかり、ヒトもネコも抗生剤を投与して治癒した事例があります。

動物ではほとんどが症状を示さない不顕性感染になることが多く、乳汁や糞便、尿、羊水などに病原体を排泄しヒトへの感染源となります。